

たて穴住居



右近次郎遺跡 第5・6号住居跡

いることから、少なくともこのころには人々は
大野で生活していたようです。この生活の跡を遺跡といえます。

じょうもん
縄文時代の生活 今から約二千年以上前、

九頭竜川くずりゅうがわや真名川まながわなどの大きな川は、ときどき

大きな洪水をおこしていました。人々は、

大きな川の近くではなく、洪水の被害が少な

く、食物や水が得やすい山裾やますそや小高い丘を好

んで住んでいたようです。それでは、人々は

どのような生活をしていたのでしょうか。 10

遺跡を調べると、さまざまなものが見つかります。土器や石器のほかにも、柱を立てた穴などの建物の跡や、ゴミを捨てた跡なども見つかります。遺跡から見つかるものを調べていくと、この当時の人々がどんな生活をしていたかがわかってきます。 15



右近次郎遺跡 第8号住居跡出土の
縄文土器（歴史民俗資料館蔵）

このころの建物は、地面を掘って床や壁をつくり、丸太で柱を組んだ家だったようです。これはたて穴住居と呼ばれ、屋根は木の枝や草などで葺かれました。建物の床には、石を組んでつくったくぼみから炭や木の灰が見つかっているので、人々は家の中で火を使って生活していたことがわかります。

大野でも、右近次郎遺跡（右近次郎）や佐

開遺跡（佐開）、下黒谷遺跡（下黒谷）からは、建物の跡がいくつも見つかって
います。このようなことから、当時の人たちは、数十人くらいのグループをつく
って住んでいたと考えられます。

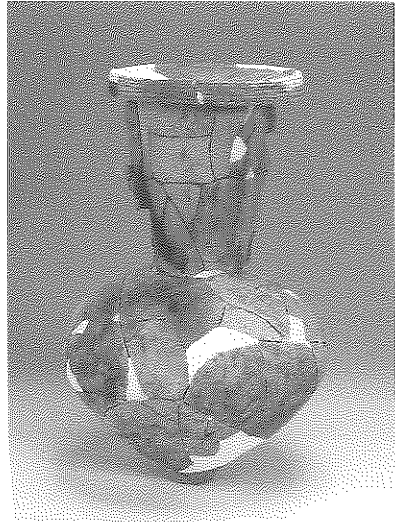
また、このころは生活に必要な道具はすべて土や石、植物や動物を使ってつく
り、金属はまだ使っていませんでした。石を割ったり磨いたりして石器と呼ばれ
る道具をつくったり、そのほかにも、動物の骨や草や木を使って道具をつくって
いました。人々はこのような道具を使って、山で動物をとったり、川や沼で魚を
とったり、山や野原で木の実や草の根をとったりして生活をしていました。また、

土器をつくり、食べ物や水をためておいたり、食べ物煮るのに使っていました。この土器は、表に縄などを使って模様が付けれられているので縄文土器と呼ばれており、この土器を使っていた時代を縄文時代といいます。大野の縄文時代の遺跡からも、たくさんさんの石器や土器のかけらが見つかっています。

弥生時代の生活

縄文時代の人々は、山や川で動物や魚、植物をとって生活をしていましたが、縄文時代の終わりごろになると、ユーラシア大陸の方から、田をつくって稲を育て、米をつくる方法が日本に伝わってきました。これによって、動物や植物をとる生活から、米づくりをしながら狩りや採集をおこなう生活にかわっていききました。また、このころに青銅や鉄といった金属を使う方法も伝わりました。このころを弥生時代といいます。

最初、稲を育てる方法は九州に伝わり、そののち日本各地に広まっていききました。大野でも、米づくりの方法が伝わると、今まで山裾や小高い丘に住んでいた人たちは、田や畑がつくりやすく、湧き水や川が近くに流れている平地に移り住みました。特に赤根川の周辺には、弥生時代の遺跡がたくさん見つかっています。また、米づくりがすすむと、生活の様子も大きくかわってきました。食糧を計



中丁遺跡出土「ひれ付きの壺」
(福井県教育庁埋蔵文化財調査センター蔵
写真: 福井県立歴史博物館提供)

して農作業をおこないました。また、村人の中から、仕事のさしずをする人もでてきました。さらに、稲をつくるための土地や水の管理をめぐって村と村が争うこともありました。

道具も、石器や土器に加えて、金属を使ったものや金属で加工した道具も使われるようになりました。土器も、

今までの縄で模様を付けた縄文土器から、より薄くてなめらかな形をした土器にかわっていききました。これらの土器は、弥生土器と呼ばれています。

大野でも、犬山遺跡(犬山)や新庄遺跡(新庄)などの調査では、たくさん弥生土器のかけらが見つかっています。下黒谷遺跡(下黒谷)や中丁遺跡(中丁)からは、土器のかけらのほかに、建物の跡も見つかっています。また、一九九七年(平成九)におこなわれた中丁遺跡の調査では、たいへん面白い形をした土器が見つかっています。この壺は、口の部分が銅鐸の形とそっくりで、全国でもたいへん珍しい土器です。

2 奈良・平安時代の大野

古墳時代の^{こふん}大野 稲作が^{いなさく}伝わったことで力を持つようになった一部の村人は、周りの小さな集団を支配し、豪族^{ごうぞく}になりました。その中で最も大きな力を持つようになったのが、大和地方（奈良県を中心とした近畿地方）の豪族^{ごうぞく}です。大和地方の人々は、越前国より東の日本海側地域を「こし（越）の

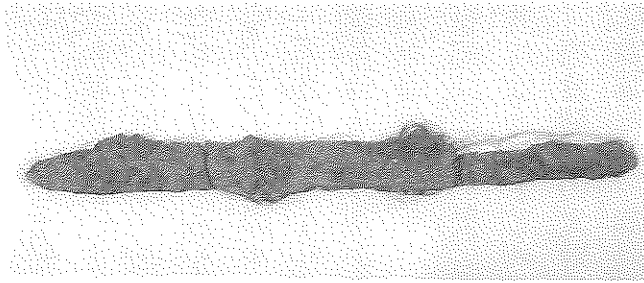
国」と呼び、のちに大和地方が日本で最も力を持つようになる、大和に近いほうから順に越前・越中・越後としました。それが定着し、今に伝わっています。

大和地方から大野へ伝わった新しい文化は、牛ヶ原や大矢戸、小山などの地域で発達し、大野にも力を持った豪族^{ごうぞく}が生まれました。

これより昔の縄文時代から、人が死ぬと墓をつくっていましたが、弥生時代には普通の人と



大矢戸古墳（大矢戸）



山ヶ鼻古墳群第6号墳出土の鉄剣
(歴史民俗資料館蔵)

支配者として墓の大きさに違いが出てきて、支配者たちは普通の人より大きな墓をつくるようになっていました。

この時代になると、これらの豪族たちは、小高い山の尾根に土を盛り上げて弥生時代よりも大きい墓をつくりました。この墓を古墳といい、前方後円墳と呼ばれる形の古墳もつくられるようになりました。古墳には、さまざまな道具や装飾品などが一緒におさめられました。

大野でもたくさんの古墳が見つかっています。特に大野盆地の西側や北側の赤根川に沿った山の尾根には、弥生時代の墓や古墳がたくさんあります。四角い形の方墳や丸い形の円墳がおもですが、山ヶ鼻古墳群(牛ヶ原・矢)からは、奥越で唯一前方後円墳が見つかりました。また、大矢戸古墳(大矢戸)には、遺体をおさめた石の

部屋(石室)があり、中からさまざまな器が見つかっています。また、山ヶ鼻古墳群からは、このような器のかげらのほかに、鉄の剣や和同開珎(七〇八年 和同元に鑄造)という貨幣も見つかっており、かなり大きな力を持つ豪族がいたこ

とがわかります。

日本各地の豪族たちは、最初はそれぞれが独立した小さな集団を支配していました。三世紀ごろ、大和地方の豪族は、ユーラシア大陸からやって来た人たちの協力によって大きな力を持つようになる、戦いや話し合いによって小さな集団をつぎつぎと支配し、日本で最も大きな力を持つようになりました。この集団を大和朝廷といます。

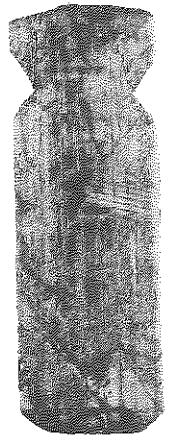
大和朝廷は、嶺北に三国や高志という地域をつくり、『国造本記』、その土地の有力者に治めさせました。この支配者を国造といます。当時、大野がこれらのまとまりの中に入っていたかはわかりません。

飛鳥時代になり、六四五年（大化元）に大化の改新がおこると、地元の豪族が国を治める方法から、土地はすべて朝廷のものとし、朝廷から派遣された役人が国を治めるようになりました。この役人を国司といます。また、国の下に郡（七世紀は評）や里（のちに郷）というまとまりをつくり、地元の有力者が郡司や里長になってまとめました。

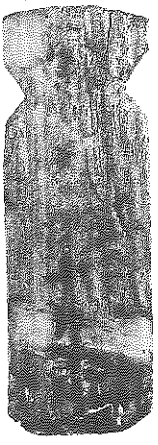
奈良時代の大野 飛鳥時代になると、朝廷は国をまとめる方法を中国から取り入れました。朝廷は、各地の国から税を集めるため、班田収授法という制度を決

めて、朝廷のものである土地を人々に分け与えて田畑を持たせ、租・調・庸という税（稲・地方の特産物・布などを納める義務）を決めました。また、田畑を分けるのに都合のよいように、土地を四角に区切る方法がとられました。これを条里制といい、昭和の初めごろまで、牛ヶ原や小山地区の水田にこの跡が見られました。

「越前国大野郡調銭」



「調銭」 天平元十月廿一日



平城宮出土の木簡（奈良文化財研究所蔵）

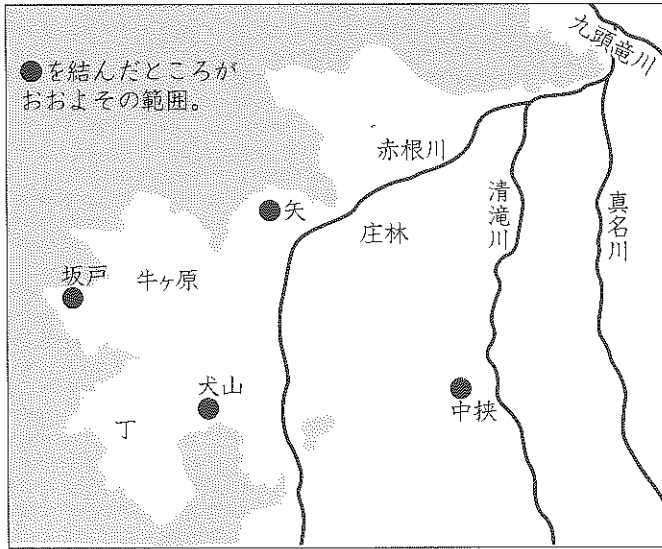
奈良時代になり都が平城京（奈良県奈良市）に移されても、この税のしくみが使われました。各地で集められた作物や特産品やお金は、税としてはるばる都まで運ばれました。平城京の中にある政治の中心の場所であった平城宮からは、さまざまな記録が書かれた、木簡と呼ばれる木の板がたくさん見つかっています。この中の税に関わる内容の木簡に、「越前国大野郡」と書かれたものも見つかっているのです。大野からも都に税を運んだことがわかります。また、租・調・庸の税のほか

に、都や地方の防衛・さまざまな工事のために、地方から人々を集める制度もありました。この制度で集められる成人した男の人を「丁」と呼んでいました。大野の上丁・中丁・下丁という地名に付く「丁」という字は、この労働に出た人々が住んでいた村に由来するものだとも考えられています。

また、この時代には、すでに大野の各地にも郷がつくられていました。木簡やさまざまな記録に、大沼（今の大野市街地あたり）・大山（市街地南部）・毛屋（勝山市下毛屋・猪野毛屋付近）・加美（小山・上庄）・資母（下庄）・出水（市街地東北部）といった郷の名前があり、今の地名の由来になったと考えられます。

奈良時代の中ごろになると、疫病や災害がたびたびおこり、土地を離れて逃げ出す人々も出てきました。朝廷は、田畑をつくることをすすめるために墾田永年私財法という制度をつくり、新しく耕した土地は、国ではなく自分のものにしてよいとしました。この制度は人々の田畑をつくる意欲をかきたて、田畑が増えました。一方、力のある寺や貴族・豪族は、逃げた農民を使って田畑を広げ自分の土地を増やしていきました。この土地を荘園といっています。

平安時代の大野 平安時代になり都が奈良から京都に移っても、荘園はどんどん広がっていきました。しだいに、豪族たちは税や役人の立ち入りを逃れるため、



牛原荘のおおよその範囲

土地を力のある貴族や寺社などに荘園として寄付し、自分はその管理者となりました。荘園が大きくなると、朝廷に入る税も少なくなり、荘園どうしや朝廷の領地との間で領地争いをするこゝも出てきました。朝廷は、国司を通して地元の

豪族を役人に取りたて、税を集めようとなりました。

このころ、大野にも大きな荘園がありました。牛原荘は、京都にある醍醐寺円光院の領地で、今の大手市街地の北半分にあがっていったようです。この牛原荘では、領地の境界のことでたびたび争いがおきていたことがわかっています。また、大野盆地の南部には安楽寿院（京都府京都市）の領地であった小山荘がありました。

